

東京国立博物館創立150年記念

特別展「国宝 東京国立博物館のすべて」より

刀剣の煌めき

今秋に開催される

東京国立博物館創立150年記念

特別展「国宝 東京国立博物館のすべて」には、

同館所蔵の国宝刀剣19振^{ふり}が初めて一堂に会する

「国宝刀剣の間」が設けられることが、

大きな話題を呼んでいます。

その美しい刀姿をご覧いただくとともに、

日本人の美意識や職人技の結晶である、

刀剣の世界をご案内します。

本展に出品される 国宝刀剣

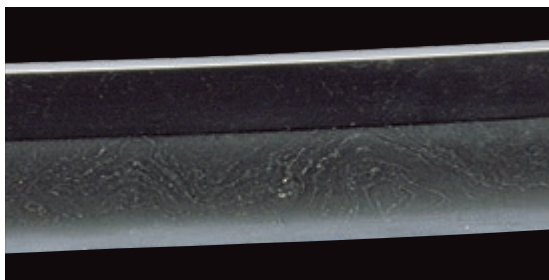
東京国立博物館所蔵の国宝刀剣はすべて平安〜南北朝時代に作られたもので、そのほとんどが弓形に曲がった「湾刀」と呼ばれる、平安時代以降に主流となった形状である。刃を下にしたものは古い刀剣に多い「太刀」で、腰につり下げる佩刀。刃を上にしたものは「打刀」と呼ばれ、腰帯に差す。[1]〜[19]の刀剣は特別展「国宝 東京国立博物館のすべて」にて通期展示される。

[1] 国宝

太刀 銘三条 (名物 三日月宗近)

平安時代 10〜12世紀 渡邊誠一郎氏寄贈

古雅で優美な太刀姿を示し、「三日月」の号は刃文に三日月形の打のけ(刃の模様)があることに由来する。天下五剣の一つに数えられる名刀で、豊臣秀吉の正室高台院(ねね)、将軍徳川秀忠が所持し、徳川将軍家に伝来した。
* 14〜15頁に基本の用語を解説しています。あわせてご覧ください



地鉄(じがね)は木目のような板目肌

茎(なかご)に近い部分の幅は広く、刃は反り、鋒(きっさき)に向かってまっすぐ伸びる。古い日本刀ならではの優美な姿





精緻な螺鈿細工に注目！ 漆を塗った上に金粉をあしらう梨地に、吉兆鳥であるオナガドリを螺鈿で表す

[3] 国宝
太刀 銘 安綱 (名物 童子切安綱)

平安時代 10~12世紀

安綱は日本刀が成立した平安時代の名工で、本作はその最高傑作に挙げられる。「童子切」の号は源頼光が酒呑童子という鬼を本作で斬ったという伝説に由来。古来名刀として知られ、天下五剣のひとつに数えられる。

天下五剣のなかで最も古く、「享保名物帳」*1によれば、豊臣秀吉の所有で徳川秀忠より越前松平家に伝来



日本美が宿る 国宝刀剣の世界

談 = 佐藤寛介 (東京国立博物館)
Sato Hirotsuke

現在、国宝の刀剣は122振(編集部注: 編集部注:)

刀剣を携帯するための外装、「刀装」を含む)あり、うち19振を東京国立博物館が所蔵し、本展ではそのすべてを展示します。

国宝刀剣は次の2つを兼ね備えています。

ひとつは造形が優れていること、もうひとつは歴史的な来歴を持っていることです。

造形とは、シルエット(刀姿)だけでなく、刃に生じた波線のような刃文、鉄の鍛錬の仕方によってあらわれる地鉄の模様などがあり、一見似たような刀でも、よく見ると個性があるのです。来歴とは、著名な武将や大名のもとを渡ってきたなどの由来・伝来のことです。「太刀 銘 三条」[1]は高台院(ねね)が、「短刀 銘 吉光」[7]は黒田如水、豊臣秀吉、徳川家綱など、錚々たる武将が所持していました。

刀剣には地域性もあり、主な産地である五箇伝のどこで作られたかによって、特徴が異なります。京都の刀は端麗で平安貴族

*1 8代将軍の徳川吉宗が、刀剣の鑑定や研ぎ、浄拭(ぬぐい)を家業とする本阿弥家に作成させた名刀台帳

特集

八雲と描いた
日本の民話——

松江 小泉セツの



小泉八雲が日本で最初に暮らした地、
島根県松江市。英語教師だった彼は
松江藩の家臣・小泉家に生まれた
セツと出会い、結婚を機に、
文学者として飛躍を遂げます。
彼女が語る昔話や、その声色^{こわいろ}、
表現は八雲の創作の源泉となり、
やがて彼女は八雲文学の
共著者のような存在に――。
セツの豊かな才能と生涯を探るべく、
2人が暮らした松江を訪ねます。

案内人＝小泉 凡

Koizumi Bon

文＝鈴木紗耶香

Suzuki Sayaka

写真＝佐々木実佳

Sasaki Mika

セツと八雲がおよそ5カ月暮らした松江の「小泉八雲旧居」。夫妻は松江、熊本、神戸、東京と移り住んだが、当時の状態のまま保存されている住居はここのみ

第1章 小泉セツの 生き方に 触れる

武家屋敷が軒を連ねる松江の塩見縄手には、セツと八雲が暮らした家、2人の貴重な展示品が並ぶ館があります。セツとはどんな人だったのでしょうか。



Koizumi Bon

こいずみ ぼん / 小泉八雲記念館館長・焼津小泉八雲記念館名誉館長・島根県立大学短期大学部名誉教授。1961年、東京都生まれ。成城大学・大学院で民俗学を専攻後、1987年に松江へ赴任。妖怪、怪談を文化資源として社会に生かす実践や、小泉八雲の「オープン・マインド」を発信するプロジェクトを世界のゆかりの地で展開。著書に『民俗学者・小泉八雲』(恒文社)、『怪談四代記—八雲のいたずら』(講談社)など。

鬱蒼とした森の中、薄紙で作った舟に硬貨を一枚載せ、鏡のように澄み切った池の水面に、静かに浮かべる。若き小泉セツと2人の女友達は、その舟の様子をじつと見守っていた。池に浮かべた舟が早く沈めば早く縁に恵まれる。近くで沈めば近くにいて人と結ばれる——これは、松江の南部に位置する八重垣神社に古くから伝わる縁占いだ。

八重垣神社は、素盞鳴尊すさのおのみことがヤマタノオロチを退治して稲田姫命いなだひめののみことを救い、夫婦になったという伝説が残る場所で、今でも良縁を願う人々から厚い信仰を集めている。友達2人の舟は、すぐに近くで沈んだ。ところが、セツの舟だけはなかなか沈まず、池の端のほうまで行ってようやく沈んだ。この結果に、セツは肩を落としたのだろうか。

のちに、異国から来た英語教師と結ばれることを、まだ彼女は知る由もなかった。

「セツは、伴侶としてだけでなく、八雲の創作に欠かせない存在でした。八雲はセツに日本の話を求め、セツは自分が知っている物語や体験を、八雲に語りました。八雲は気に入った話を何度も何度もセツにせがみ、物語の世界に入り込んで、母語に綴り直したのです。あの『耳なし芳一』や『雪女』もセツの存在なくしてはありえなかったでしょう」

教えてくれたのは、セツと八雲のひ孫にあたる民俗学者の小泉凡さんぼん。今回のセツと八雲をめぐる旅の案内人だ。今から130年前、現在よりはるかに高い言葉と文化の壁を乗り越え、いかにしてセツは八雲の理解者となったのだろうか。



城下町の雰囲気をも今に伝える塩見縄手



【上】八雲の著書や関連書を多数揃える記念館ライブラリーにて 【右】小泉家の写真などが並ぶ階段展示。凡さんの妻でコーディネーターの祥子(しょうこ)さんから解説を聞く 【左】記念館の外観。木造平屋建ての和風建築で、2016年にリニューアルオープン



「山で鳴く山鳩や、日暮れ方にのそりのそりと出てくる墓ひまがきがよい御友達でした」と、微笑ましい眼差しを向けている。

「この庭は、八雲が住んでいた当時とほとんど変わっていないんです。座敷に座って風を感じながら眺めてみてください。本当に気持ちいいですから」

凡さんと一緒に八雲のお気に入りの場所

編集者としてのセツ

へルン旧居

「庭のある武家屋敷に住みたい」という八雲たつての希望で、2人は北堀町の武家屋敷を新居とした。それが、記念館に隣接する「小泉八雲旧居(へルン旧居)」だ。この屋敷は、居間、書斎、セツの部屋などをぐるりと囲むように庭が配されている。八雲はこの庭を大変気に入って、学校から帰るとすぐに和服に着替えて庭を眺めるのを楽しみにしていた。セツはそんな八雲に、

「先生」と呼ばれ、松江ではその名が定着している。

た。そして2人は共に暮らす道を自然と選んだ。この時から試行錯誤しながら作り上げていった独特の日本語は、のちに「ヘルン言葉」と呼ばれるようになった。八雲は英語教師を務めていた島根県尋常中学校の生徒から「ハーン先生」ではなく「へルン先生」と呼ばれ、松江ではその名が定着している。

*小泉セツ著『思い出の記』より

第2章

セツと八雲 ゆかりの 場所を歩く

セツが幼少期から慣れ親しんだ寺院、八雲が好んだ石像、夫妻がこよなく愛した港町……2人の足跡を追いながら、松江をのんびり歩きます。

ゆるい出雲の狐像

城山稲荷神社

記念館と旧居を見学したあとは、塩見繩手の並びにある「八雲庵」で、ランチ休憩を挟む。松江の殿様や武士たちも愛した出

雲そばをいただいてから、2人の面影を追って、街を歩いてみよう。

まずは、八雲のお気に入り散策路だった、城山稲荷神社へ。急な石段の上にある境内には、無数の狐の石像が鎮座している。全国に祀られている狐像のなかでも、八雲は特に、独特のゆるさがある出雲の狐像を愛した。

「この境内にある狐像は、宍道湖南岸にある宍道町来待地区で採れる来待石から作られています。来待石は柔らかく加工しやすいのが特徴ですが、その分風化しやすく、時間が経つと角が取れてきて、優しさと味わいが出てくるんです」と凡さん。

八雲は、神社にまつわるこんな話を書き残している。徳川家康の孫である松平直政が松江に来た時、御前に1人の美しい少年が現れ、「城内に私の住まいをお建て下さいますなら、城内はもちろん、城下の家々から江戸のお屋敷まで、火災からお守りいたしましょう」と告げて消えた。そこで直政はこの稲荷神社を建てたという。

八雲に語った伝説

松江城

城山稲荷神社と松江城天守は散策路で結ばれており、歩いてすぐ。現在でこそ、国宝として威容を保つ松江城天守だが、実は



城山稲荷神社には狐像が2千体以上あったという。なかでも八雲は耳が欠けたこの像を気に入っていた

八雲が松江に来た当時は、トカゲやコウモリが住み着くような有様だった。

「1875（明治8）年、松江城に廃城令が下ります。そのため、二之丸、三之丸にあった建物は取り壊されてしまいました。天守は、地元の豪農・勝部本右衛門父子と旧藩士・高城権八らの尽力で、なんとか保存されたんです」（凡さん）

松江城にはこんな伝説がある。城壁を築く際に城下から盆踊りが上手な少女がさらわれ、人柱として生き埋めにされた。その後、女の子が踊ると城山が震えるので、盆踊りが禁じられたという。八雲はセツからこの話を聞いたのか、「知られぬ日本の面影」に記した。そんなイメージも手伝い、八雲は松江城天守のことを「不気味な城」と評したが、生家や養家が忠義を尽くして



八雲庵の出雲そば。朱塗りの丸い器に盛った蕎麦に薬味をのせ、そばだしを直接かけていただく

第3章

セツが 生まれた 松江に遊ぶ

城下町の雰囲気の色濃く残す松江は、散策するだけでも楽しい町。ふらっと立ち寄りしたい、小泉八雲・セツ夫妻ゆかりの場所がたくさんあります。

セツが愛した羊羹

1890（明治23）年8月30日、八雲は横浜港から汽船に乗り、英語教師に任じられた松江に向かった。日本海側から内海を経て、松江大橋の近くの港に到着。橋の北詰にあった富田旅館に宿泊した。翌朝、外から聞こえてくる「カラコロ」という下駄の音や米つきの音は八雲に強い印象を残し、

のちに『知られぬ日本の面影』にその感動を記している。

まずはその跡地に立つ石碑を訪ねた。近くに「一力堂」というセツと八雲ゆかりの和菓子屋さんがあるというので、立ち寄ってみた。ここには、「ハーン羊羹」という名物がある。

「以前、凡先生のお父さんの時ときさんがうちにいらした時、『我が家では正月に一力堂の羊羹を食べていた』と教えてくれたんです。また、その味を再現できないかと相談を受けたので、探してみたら1883（明治16）年のレシピが出てきたんですよ」とは、9代目当主の高見雅章さん。八雲の孫にあたる時さんは東京生まれだが、セツが松江の故郷の味を懐かしみ、小泉家では正月に松江から取り寄せた羊羹が並んだという。日持ちする菓子なので暮れの頃、松江から上京する人に頼んで手に入れていたのではないかと、高見さんは推測する。

では、八雲はどうだったのだろうか。疑問をぶつけてみると、「晩酌ばんしやくの時に、黄金こがね

あんこの濃い
味が特徴です！



【上】一力堂9代目当主の高見さん 【右】ハーン羊羹。餡を多く使用しており、現代の羊羹と比べてやわらかい



松江の城下町にある堀を屋根付きの小船でめぐる「ぐるっと松江堀川めぐり」。3つのエリアを運航し、四季折々の自然が味わえる

城下町を小船でめぐる

牡丹ぼたんという和菓子をビールのつまみにするほどの甘党だったそうですよ」ととのこと。ちなみに、そのビールを購入していた山口卯兵衛薬局うへえもすぐ近くに現存すると教えてくれた。2022年になった今も、最近のことのようにセツと八雲の話が出てきて、当時の面影が残るゆかりの場所も少なくないことに驚かされた。

ここからは、松江城のお堀を小船でめぐる「ぐるっと松江堀川めぐり」を楽しもう。3つの乗り場のうち、「カラコロ広場乗船

おいしいもんには
わけ
理由がある

第45回

文 || 土井善晴
Doi Yoshinaru
写真 || 岡本寿
Okamoto Hisashi

千日前のお好み焼屋「おかる」の豚玉。しっかり焼き上げたら仕上げは甘辛2種のソースで。鉄板からじゅっと音がして、香ばしい匂いがふわっと広がる

みんなで食べたい大阪グルメの代表選手・粉もん。アットホームなあたたかさが魅力です

粉もんは、楽しい

《大阪市》

土井さんにとって、生まれ故郷の大阪は特別な町。家族で過ごした思い出があり、定食屋さんや和菓子屋さんなど、昔から心を通わせる店がいくつもあって、機会あるごとに足を運ぶのだそう。「いつもは来ないけれど、道頓堀の派手なネオンも、たまにはええもんですね」。赤や黄色が眩しい通りをぶらぶらと歩く

どいよしはる／1957年、大阪府生まれ。料理研究家、十文字学園女子大学特別教授。NHK「きょうの料理」に出演。『一汁一菜でよいという提案』（新潮社）など著書多数

子供の頃、よく行くお好み焼屋さんが近所にあったんです。鉄板の前に座って、店のおばちゃんにお好み焼を焼いてもらって、話をしながら大人のようにテコで切って、そのテコで口に運ぶ。食べ終われば隅っこへ移って、漫画や大人の雑誌をこっそり読む。すっかり安心して、親の迎えを待っていました。お好み焼屋さんは家の外で子供が安心できる居場所。託児所じゃないけれど、母親は店のおばちゃんと親しくて、家族のような関係でした。ご近所はみな知り合いで、助け合って暮らしていた時代です。

大阪の人にとって、お好み焼は家族の味でもあるんです。いつも仕事で留守がちな父（料理研究家・土井勝）が珍しく家にいる日曜日、母は早めの夕飯に、お好み焼の支度をします。その日は特別で、テレビのある居間にお膳（座卓）を2つ並べ、ガスコンロを据えて鉄板を置き、ジュースも用意してくれました。焼くのは父で、1枚焼いては6等分に切り分けてくれました。数枚焼いたら「次は焼きそば」とリクエストして、お腹いっぱい食べました。大阪では子供が急に帰省して「なんかある？」とい

えば、「お好み（焼）くらいしか出来ないよ」って、ちくわやキャベツを刻んで、生地を合わせて卵を割り入れ、フライパンで焼いてくれるのです。

思い出のたこ焼

今回のテーマは、今では「粉もん」と呼ばれるたこ焼、お好み焼。大阪のよき庶民文化を代表する老舗を訪ねます。

大阪の中心部、梅田から御堂筋を南へ下り、難波を過ぎて、そのまま岸和田、和歌山の御坊ごぼくにつながる国道26号沿い。秀吉公が立ち寄ったと後世に伝わる天下茶屋（西成区）に、かつて親戚が営むパーマ屋さんがありました。隣がミックスジュース屋さんが、その隣のたこ焼屋さんが、大阪のたこ焼を初めて作った「会津屋」でした。当時から特別なたこ焼屋さんで、月給10万円貰えたらいいという時代に、朝早くから難波あたりのデパートや銀行の人が、5千円分、1万円分のたこ焼を、会社のお遣いものとして買っていくので大忙しでした。

取材に伺うと、私よりも10歳ほどお若い3代目社長の遠藤勝さんが待ってくれてい

